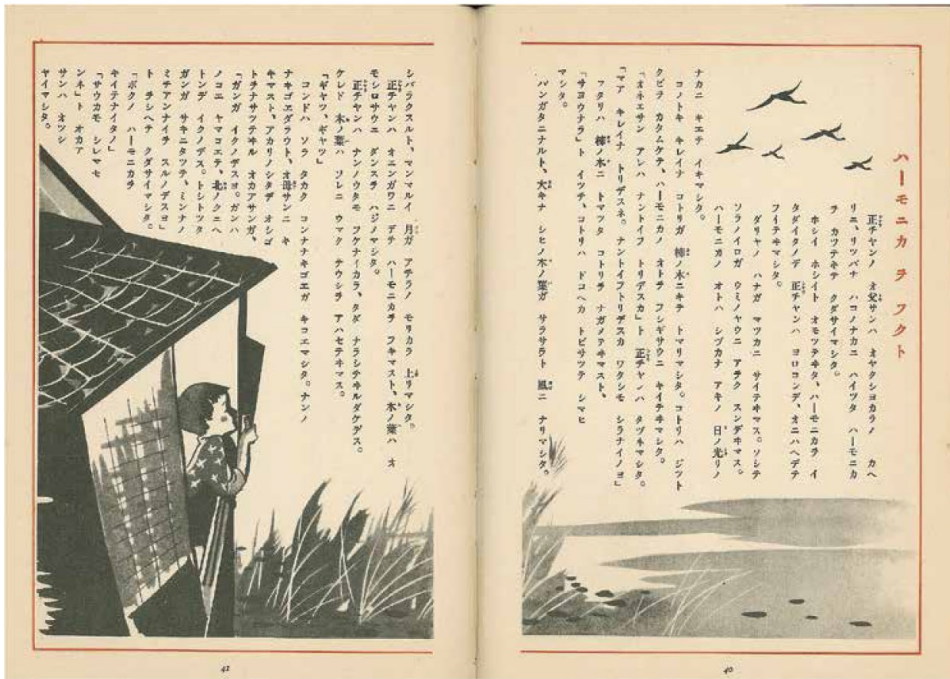


挿絵の魅力（『小川未明コドモエバナシ』）



『小川未明コドモエバナシ』は、昭和10年（1935）1月、東京社より刊行された未明の童話集です。未明童話は、雑誌へ発表される場合も、童話集へ収録される場合も、童話の文章だけが掲載されるより、挿絵が添えられ、文章と挿絵がバランスをもって紙面を構成することが多かったようです。

この童話集は、「エバナシ」と題されているとおり、絵と話が意識的に組み合わせられた童話集です。本書の装幀は初山滋、口絵は武井武雄、挿絵は

初山滋・安泰・深沢省三・武井武雄・川上四郎・前島とも・福田新生・清水良雄の8名が担当しています。収録童話数は55編。カタカナのみ、あるいは漢字カタカナで書かれた、幼年向けのカタカナ童話集です。見開き1頁もしくは2頁程度の短いカタカナ童話に、上記8名のいずれかの挿絵が描かれています。本書は、童話の側から言えば未明のカタカナ童話としての最初の精華集であり、挿絵の側から言えば挿絵画家の個性を競う見本帳となっています。

未明は「幼児童話について」（『日本の子供』昭和13年（1938）12月）で次のように述べています。「幼児に対するお話の筋は単純に、自然に、素直にして、明朗なものがいい」「幼児のお話は、詩的な童話の中でも、特に詩の部類に属すべきもの」——では未明の考えは、どのように童話に具現化されたのでしょうか。

「秋ノ野」（「コドモアサヒ」昭和8年（1933）9月）を例に考えてみます。空の色が澄んできました。野原には色とりどりの秋草が咲いています。男の子も女の子もいろいろな遊びに興じています。草むらにはいろいろな虫。やがて、みんなは家へ帰っていきました。夜になると、まるい月。秋の野に虫たちが鳴きだしました。チョコレートの銀紙が月の光につめたく光っています。あらずじは以上のとおりです。「秋ノ野」には、多数の草花の名が登場し、多数の遊びが紹介され、多数の秋の虫が登場します。昼から夜へ移り変わる時間のなかで、秋の野を舞台に、かわいい小さな命たちがクローズアップされます。誰もいなくなった野原に光る「チョコレートの銀紙」のイメージは、詩的です。読者の目にうかぶ野原には、色とりどりの花が咲き、子供たちの嬌声や歓声が聞こえ、さまざまな虫の音が聞こえます。そして夜の世界に冷たく光るチョコレートの銀紙——。

『小川未明コドモエバナシ』では、ある場面が印象的に語られ、その意味するところを子供たちが感じ取るように作られています。その場面をいっそう印象づけるのが挿絵です。「秋ノ野」に似た静けさをもつ童話に「ハナビノオト」や「ハーモニカヲフクト」があります。

上の絵は、「ハーモニカヲフクト」（「コドモノクニ」昭和8年（1933）10月）の童話に添えられた清水良雄の挿絵です。お父さんが正ちゃんのほしかったハーモニカを買ってきます。ハーモニカをふくと、音は静かな秋の光のなかに消えていきます。雁が鳴きながら飛んでいきます。「ぼくのハーモニカを聴いて鳴いたの」「そうかもしれませんね」お母さんはそう言うのです。